Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-06

青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向に関する心理発達的研究

相澤，直樹

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2015-12-18
(Date of Publication)
2016-12-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
乙第3295号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003295

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式７）

論 文 内 容 の 要 旨

氏　　名　相澤　直樹
専　　攻　人間発達専攻
指導教員氏名　森岡　正芳

論文題目（外国語の場合は，その和訳を併記すること。）

青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向に関する心理発達的研究

論文要旨

本研究では，青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理構造を解明することを通じて，自己確立の課題を中心とする青年期の心理発達を探求することを目的とした。また，対人恐怖傾向と自己愛傾向がともに精神・心理臨床の対象となる心的障害に由来するものであることから，本研究は，対人恐怖症と自己愛人格障害の心理構造の解明にも資するものと考えられた。以上の目的に向けて，本研究では特に両傾向における自己への意識関心の特徴と対人関係の特徴に分けて，一般青年男女を対象とする調査研究を基礎にしつつ両者の心理構造の検討に取り組んだ。

第1章においては，青年期の自己への意識関心，ならびに，対人関係や友人関係の発達に関する先行研究を概観し，本研究に必要となる基礎的な発達心理学的知見を整理するとともに，その過程における対人恐怖傾向と自己愛傾向の位置づけについて論じた。

第2章においては，自己への意識関心の観点から対人恐怖傾向と自己愛傾向の解明に取り組んだ。第2章第1節（研究1）では，森田ら（森田, 1960; 森田・高良, 1953）に始まる対人恐怖症の臨床研究，小川ら（小川, 1974; 堀井・小川, 1996, 1997）等による一般青年の対人恐怖傾向に関する研究，また，Kernberg（1975）とKohut（1971, 1977）による自己愛人格障害の臨床研究，自己愛人格目録（NPI, Raskin & Hall, 1979）による自己愛傾向の諸研究を概観し，両傾向の意識や行動面での特徴，ならびに，自己意識上の共通点について検討した。その結果，前者については両傾向ともに，自己の価値評価的な側面に意識関心が集中しており，対人関係においてもそれが中心的な役割を担っていることがみいだされた。また，自己意識については，一見するところ相反するような特徴を示しつつ，その背景に共通の矛盾対立構造が潜んでいることが示唆された。すなわち，対人恐怖の否定的で萎縮的な自己像の背景に強気で意地っ張りな側面が，また，自己愛人格の肯定的で誇大的な自己像の背景に否定的で無価値な現実体験が潜んでいることが示唆された。そこで，本研究では，それらの矛盾対立構造を理想自己と恥ずべき自己の分極構造として整理した岡野（1998）の知見を基礎に，対人恐怖傾向と自己愛傾向の背景に，肯定的で誇大的な理想自己と，それに比して過度に否定的で萎縮的に評価された現実自己の二重構造を仮定し，以下の4編の調査研究を通じてその妥当性を検討した。

第1章第2節（研究1）では，自己の二重構造を理想自己と現実自己の不一致の観点からとらえ，一般青年男女を対象に対人恐怖傾向と理想自己—現実自己不一致との関係を検討した。自己不一致の測定にあたっては，個々人によって理想自己の重要な側面が異なる可能性を踏まえ（Higgins, Bond, Klein, & Strauman, 1986; 遠藤・井上・蘭, 1992），そのことを反映できる個性選択的方法に

個性選択的方法により理想自己と現実自己を測定した。対人恐怖傾向の各得点を目的変数とする重回帰分析を実施した結果，“精神的強さ”と“社交性”の側面における理想自己—現実自己不一致が対人恐怖傾向に正の効果を及ぼしていることが示された。以上の結果は，これらの側面における理想自己と現実自己のズレを大きく体験している人ほど対人恐怖傾向が高いことを示唆しており，本研究における自己の二重構造の仮説を支持する結果である。

第2章第3節（研究2－1）では，自己の二重構造から必然的に生じると考えられる自尊感情の不安定性との関連を検討した。自尊感情の不安定性の測度として，一定期間に繰り返し自尊感情尺度への評定を求める生活内評定法と，質問形式で不安定さを測定する自己報告法の2つが用いられた。自尊感情の水準と不安定性を要因とした2要因分散分析を実施した結果，生活内評定法を用いた場合には，対人恐怖傾向尺度の“否定的な公的自意識”に，また，自己愛傾向尺度の“権威性・他者の操作”と“自己耽溺”に，仮説を支持する自尊感情の不安定性の効果がみられた。一方，自己報告式による自尊感情の不安定性の測度を用いた結果では，仮説とは逆に，不安定性が低いほうが対人恐怖傾向や自己愛傾向が高くなることが示唆された。前者の結果は，自尊感情の不安定性が高いほど対人恐怖傾向，自己愛傾向が高くなることを部分的に示唆するものであり，自己の二重構造の仮説を支持するものといえた。他方，後者の結果については，研究仮説に反するものであるが，対人恐怖傾向や自己愛傾向に特有の否認や回避の影響によるものと考察された。

また，第4節（研究2－2）では，同様の生活内評定法により得られた現実自己像，ならびに，理想自己の繰り返し反復測定データを基に，対人恐怖傾向，ならびに，自己愛傾向と理想自己－現実自己不一致の不安定性との関係を検討した。相関分析の結果，対人恐怖傾向の“否定的な公的自意識”と“向性”，“情緒安定性”，“誠実性”の側面における自己不一致の不安定性が正の相関を示した。また，自己愛的傾向の“自己耽溺”と“向性”，“情緒安定性”，“過敏性”の側面における自己不一致の不安定性，また，“特権性・特殊性”と“強靭性”，“過敏性”の側面における自己不一致の安定性との間に正の相関が得られた。以上の結果も，対人恐怖傾向と自己愛傾向の両者に，現実自己が理想自己に近づいたり離れたりする変動性が影響していることを示唆している点で，自己の二重構造の仮説を支持するものと考えられた。

以上の結果を受けて，第3章第5節（研究3）では，一般青年男女から得られた対人恐怖傾向と自己愛傾向の測定データに対し，自己の二重構造から対人関係の諸問題が発生するとの仮説モデルを作成し，共分散構造分析を実施してその妥当性を検討した。従来の対人恐怖傾向関連尺度，自己愛傾向関連尺度を参考に，対人恐怖傾向と自己愛傾向度を同時に測る尺度項目群を作成し，探索的因子分析で７因子解を抽出した。それをもとに下位尺度を構成し，これまで検討してきた理論にしたがって，誇大自己（理想自己），萎縮自己（現実自己），対人的傷つき易さの3つの潜在変数を含む仮説モデル（モデル1）を作成した。同時に，比較対照のために，対人恐怖傾向と自己愛傾向がそれぞれ別々の因子により規定されるという2因子モデル（モデル2）も検討した。共分散構造分析によりパス係数の推定，ならびに，モデルの適合度の算出を行ったところ，モデル1についてすべてのパスについて有意な係数が得られるとともに良好な適合度が示された。以上の結果より，誇大自己（理想自己）と萎縮自己（現実自己）の二重構造から対人関係上の問題を発生するとする本研究の基本仮説が支持された。

第3章では，対人関係の観点から対人恐怖傾向と自己愛傾向の諸特徴を検討することを試みた。第1節では，これまで先行研究から対人恐怖傾向はもとより自己愛傾向においても否定的な他者認知の影響が指摘されていることを確認した。そのうえで，前述の自己の二重構造が基本的に肯定的に評価された誇大自己に起因することを確認し，従来の誇大自己や自己愛の概念に批判的検討を加えた結果，その背景に幼若な心理が働いていることが示唆された。以上の考察を受けて，第2節では，辻（2003, 2008）による原体験理論を導入して，青年期発達との関連で対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる否定的な他者認知の構造を考察した。その結果，青年期においては，原体験の融合合一的な体験世界から見分けと区別の発達に伴って，それが自分の見分けと区別までに到達するが，その際に葛藤や内的もつれの体験が生じるために，青年は通常不安や恐れの感情を体験すると想定された。そして，対人恐怖傾向では，このような不安や恐れの体験を受動的に嫌がり回避しようとする点に特徴があり，そのような嫌悪感や忌避感を周囲の動性大同年輩の友人関係に合一化して体験するため，“（他者から）嫌われている”，“避けられている”と体験しやすくなると推測された。他方，自己愛傾向では，同様の不安や恐れに対してより能動的に排斥しようとする点に特徴があると考えられ，不安や恐れの感情，それに対する否定的な評価や脱価値化，ならびに，怒りや攻撃性の体験を周囲の友人関係に合一化して体験するため，他者は否定的で敵意的なものと体験されると推測された。以上のように考えると，対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる否定的な他者認知の特徴が理解されるものと思われた。第3節（研究4）では，ロールシャッハ検査法の事例検討を通じて，典型的に受動的な反応様式を示した強迫性障害の一事例との比較検討に基づいて，対人恐怖症（自己臭恐怖）の体験様式について検討した。その結果，原体験理論から考察されたとおり，融合合一的な体験様式と体験の受動性の特徴が確認された。続く各節では，このような対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる否定的な他者認知について，4編の実証的な調査研究により検討を試みた。

第3章第4節（研究5）では，対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる他者認知の偏りを対人場面における2種類の否定的な他者意図判断傾向，つまり，嫌悪判断と敵意帰属として整理し，場面想定法による測定尺度の作成に取り組んだ。嫌悪判断が生じやすい対人疎外場面と敵意帰属が生じやすい対人挑発場面を具体的に構成し，各場面への自由記述回答の分析を通じて，それぞれの場面に対する認知と情緒反応の特徴を検討した。以上のデータを基に対人疎外場面3場面，対人挑発場面3場面で構成される他者意図判断測定法を作成し，一般青年男女を対象とする調査を通じて妥当性の検討をおこなった。その結果，攻撃性や公的自意識，相互作用不安との間で妥当性を支持する結果が得られた。

第5節（研究6）では，以上のように作成した意図判断測定法を用いて，対人恐怖傾向，ならびに，自己愛傾向との関連を検討した。一般青年を対象に質問紙調査によりこれらの関係を検討したところ，嫌悪判断と対人恐怖傾向との間では仮説通りの有意な関連が検証された。しかしながら，敵意帰属と自己愛傾向についてはかなり弱い関連しか見いだされず，仮説を支持するに十分な結果は得られなかった。以上のことから，対人恐怖傾向についてはより詳細な認知の偏りとの関連の検討が必要であると考えられた。一方，自己愛傾向については，調査方法，研究仮説等の再検討が求められた。

第6節（研究7）では，前節の結果を受けて，対人恐怖傾向における認知の偏りの特徴をより詳細に検討するため，心的障害に広く関連するとされる自動思考に着目し，嫌悪判断と自動思考の対人恐怖傾向に対する影響を検討した。対人疎外場面による他者意図判断測定法と対人恐怖心性尺度を含む質問紙を一般青年男女に実施し，共分散構造分析を用いてモデルの検討をおこなった。仮説モデルとしては，嫌悪判断と自動思考がそれぞれ独立的に対人恐怖傾向の対応する側面に影響を及ぼすと仮定するモデル1と，両者がともに対人恐怖傾向のそれぞれの側面に効果を及ぼすことを仮定するモデル2を作成し検討したところ，モデル2のほうがより優れた適合を示した。以上の結果から，対人恐怖傾向に対しては嫌悪判断と自動思考の両者が有意な影響を及ぼしていることが検証された。ただし，対人恐怖傾向のそれぞれの側面への効果を詳しく見ると，嫌悪判断のほうがより大きな影響を与えているものと考えられた。以上のような結果は，前述の原体験理論から見た対人恐怖傾向の理解に符合するものと考察された。

一方で，自己愛傾向と敵意帰属の関連については，第3節の結果から再検討の必要性が示された。そこで主に，測定法の信頼性の問題，ならびに，理論的仮説の問題，性差の影響が示唆されたので，第7節（研究8）では，前者については想定場面の数を4場面に増やすとともに敵意帰属の計算方法に修正を加えた。後者については，Kernberg（1975)の自己愛人格障害に関する理論を検討し，自己愛傾向に対する敵意帰属の効果に対して，怒りの情緒反応が調整変数として参加する可能性が示唆された。つまり，怒りの情緒反応が強い場合，敵意的な他者の認知に対して対抗することにより，理想的で誇大的な自己意識を中心とする自己愛傾向が維持されると考えられる。それに対し，怒りの情緒反応が弱い場合，そのような対抗ができずに自己愛的抑うつが高まるといった関連が予想された。以上の方法論的，ならびに，理論的な変更を踏まえ，一般青年男性を対象とする2度の調査研究により仮説の検証を試みた。調整変数の分析については，交互作用項を含む階層重回帰分析を実施した（Aiken & West, 1991; Cohen, Cohen, West, & Aiken, 2003）。その結果，研究1と研究2のいずれにおいてもおおむね同様の有意な交互作用が検出されるとともに，研究2において自尊感情を統制した分析を行った結果，自己愛傾向の“有能感・優越感”についても仮説と一致する有意な結果が得られた。以上の結果により仮説は支持されたものと考えられた。

第4章では，本研究の総括的な考察を行うとともに今後の展望を論じた。まず，第2章と第3章の研究成果により，対人恐怖傾向と自己愛傾向がともに青年期以降に問題となる現実自己の受け入れ難さの現れであることが示唆された。さらに，第3章における対人関係の観点から見た考察検討により，それらの現実自己の受け入れ難さの背景に，幼少時期から続く母子密着的な原体験世界からの脱却の困難さが影響していることが明らかとなったと考えられた。また，本研究中の考察より，対人恐怖傾向と自己愛傾向にみられる共通性が幼若な原体験心性に由来するものであること，さらに，両傾向の差異が上記の課題への対応における受動性と能動性の違いにあること等の整理がなされたものと考えられた。さらに，本研究では，とくに対人恐怖傾向と自己愛傾向を同時に取り上げて検討したことにより，誇大自己と萎縮自己の矛盾対立構造や原体験心性と現実の自分自身への見分けと区別の葛藤など，青年期の矛盾と葛藤をはらむ心理を広くとらえることが可能となったと考察された。

（注）3,000～6,000字（1,000～2,000語）でまとめること。

別紙様式５

［論文博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　　名	相澤　直樹		
論文題目	青年期における対人恐怖傾向と自己愛傾向に関する心理発達的研究		
判　　定	合　格 ・ 不　合　格		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	主　査	教授	森岡　正芳
	副　査	教授	吉田　圭吾
	副　査	教授	河﨑　佳子
	副　査	教授	近藤　徳彦
	副　査	准教授	谷　冬彦

要　旨

本論文の目的は、青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理構造を、一般青年を対象とする調査実証研究により解明することを通じて、自己確立の課題を中心とする青年期の心理発達の様相を検討することにある。とくに、これらの問題について自己への意識関心の観点と対人関係の観点に分けて検討をおこなった。また、両傾向は対人恐怖症と自己愛人格障害という臨床様態に由来するものであることから、本論文はそれらの問題の解明にも寄与するものと考えられる。

研究結果の概要としては、第1章において、青年期の自己と対人関係の発達に関する先行研究を概観し、基礎的な発達心理学的知見を整理した。第2章においては、自己への意識関心の観点から対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理の探求がなされた。対人恐怖と自己愛人格に関する先行研究から、両傾向を駆動する要因として、過度に肯定的で誇大的な理想自己（誇大自己）とそれに比して過剰に否定的に評価された萎縮的な現実自己（萎縮自己）からなる自己の二重構造が仮定された。そして、この仮説の妥当性を検討するために4篇の質問紙調査研究が実施された。研究1においては、対人恐怖傾向と理想自己ー現実自己不一致の関連が検討され、仮説を支持する結果が得られた。研究2－1、研究2－2ではそれぞれ対人恐怖傾向、ならびに自己愛傾向と自尊感情の不安定性、自己不一致の不安定性との関連が検討され、おおむね仮説を支持する結果が得られた。以上の成果を踏まえ、研究3では自己の二重構造を含む統合的モデルを作成し、調査研究によりその妥当性を検討した。その結果、誇大自己と萎縮自己の二重構造から対人的傷つき易さが生じることを仮定する理論モデルが支持された。

第3章においては、対人関係の観点から対人恐怖傾向と自己愛傾向の心理の解明に取り組まれた。両傾向の共通要因として否定的な他者認知を確認するとともに、自己愛概念に関する批判的検討を通じて幼若な心理の影響を見出した。そして、心の営みの起源を出生以前の胎内体験に比定する原体験理論から両傾向の心理を再検討し、両者の否定的他者認知について現実自己への気づきに伴う不安や恐怖を友人関係に合一的に体験したものとする理論仮説を導出した。この仮説を対人恐怖症（自己臭恐怖）のロールシャッハ検査事例の解析により確認するとともに（研究4）、4編の質問紙調査研究によりその妥当性を検討した。研究5においては、対人恐怖傾向と自己愛傾向の否定的な他者認知をそれぞれ嫌悪判断と敵意帰属と概念化し、それらの測定尺度を開発した。研究6では、それらの尺度を用いて対人恐怖傾向と自己愛傾向との関係を検討した。研究7では、対人恐怖傾向に対する嫌悪判断と抑うつ的自動思考の効果が検討され、両者がともに対人恐怖傾向に影響することが示された。研究8では、自己愛傾向について、新たに怒りの情緒反応を調整変数とする敵意帰属の効果を理論化し、自己愛傾向に対する敵意帰属と怒りの情緒反応の交互作用効果を検証した。第4章では、本研究で明らかとなった青年期の心理発達の意義、青年期の対人恐怖傾向と自己愛傾向の共通性と差異、ならびに両者を同時に検討することの意義等に関する総括的な考察をおこなった。

本論文は学位申請者の20年にわたる綿密な研究を集大成されたものである。その主要な成果として、従来指摘されてきた両傾向における自己の二重構造を実際の調査研究により検証するとともに、新たに否定的な他者認知に着目して両者の心理構造を解明したことが挙げられる。とくに後者について、その理論構築の過程で従来の自己愛概念を新たな視座から検討し、原体験理論に基づいて否定的な他者認知の成立構造を理論化した点、ならびに、そこから否定的な他者認知が対人恐怖傾向と自己愛傾向に与える効果について実際の調査研究により検証した点は、特に新規性と独創性が高く評価される。よって，本審査委員会は，学位申請者の相澤直樹は、博士（学術）の学位を得る資格があるものと認める。

なお学位申請者は、本論文に関わる業績として以下に示す4編の論文を主要関連学会誌に掲載しており、他の学術論文、著書、学会発表を含め博士学位申請（論文博士）の基本的要件を満たしている。

相澤直樹 (2015). 社交不安に対する対人場面の解釈の偏りと自動思考の効果 心理学研究, 86, 200-208.

相澤直樹 (2011). 対人葛藤場面における他者の意図の判断と情緒反応について ――場面想定法による敵意帰属と嫌悪判断の測定とその妥当性―― 心理臨床学研究, 29, 365-370.

相澤直樹 (2003). 強迫性障害の一事例研究――図版任せの観点から―― ロールシャッハ法研究, 7, 62-73.

相澤直樹 (2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, 50, 215-224.